

# 幼児期における音楽の必要性と指導方法

中 東 愛 子

四條畷学園短期大学

Necessit of Music and Method of Instruction for Young Children

Aiko Nakahigashi

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第50号 別刷

平成29年12月25日



## 幼児期における音楽の必要性と指導方法

中 東 愛 子\*

### Necessit of Music and Method of Instruction for Young Children

Aiko Nakahigashi

#### 1. はじめに

私たちは、生まれた時から音楽とともに生きている。

楽しいときは心が弾み、自然と口ずさんだものが音楽になり、他者とその喜びを共有することもできる。また悲しいときは音楽を聴くことによって心を落ち着かせるのにしばし用いられる。

生活する上で、音楽は切り離せないものである。

また音楽は、言葉の壁や世代を超えてお互いに理解、共有することができる。

楽器を用いた音楽だけでなく、風の音、雨の音、川の流れ、生き物の声、そういった音が音楽になり自然の中に溢れている。

幼児のうたにも、「かぜさんだつて」作詞：芝山かおる、サトウハチロー補佐 作曲：中田喜直、「あめ」作詞：杉山米子 作曲：小松耕輔、「ことりのうた」作詞：与田準一 作曲：茶川也寸志、「お星さま」作詞：都築益世 作曲：團伊玖磨 などがあり、幼児の心を豊かにさせる童謡がたくさんある。

人間の脳の発達において著しい成長をみせる幼児の段階に音楽を身につけることは、人間の感情、他者とのコミュニケーションをとる上でとても大切なものである。

先に述べたように、人間がこの世に生を受けたときから音、音楽が溢れかえっている。では、音が聞こえてくるのはいつ頃からなのか。それは胎児にまで遡る。母体の中で成長していくにつれ、耳が形成され聴覚が発達すると音が聞こえるようになる。その頃からどのような音を伝えていくのかを考え、大切にしていきたい。その後の成長を

年齢とともに少し述べてみる。

乳児期…音がする方向に顔を向けることができ、声を出すことができる

1歳児…言葉を少しずつ覚え始め、音楽に興味を持ち音楽とともに体を動かすことができる

2歳児…言葉を話し始め、言葉の簡単なうたを歌えるようになる。また、言葉にあわせて部分的にリズム打ちができるようになり、他者と一緒に楽しむことができる

こういった音と触れ合った生活をしていく上で自我の芽生え、表現活動が発達していくのである。その後、幼稚園に入ると他者との集団生活が始まる。その中で生涯におけるよりよい感性と表現を養っていくのに幼児音楽は最も必要であると考えられる。

#### 2. 方法

次に、こういった手法で音楽と触れ合っていくべきかを実践を交えて述べていく。

幼児には生演奏を聴く機会というのは少ない。もちろん機械を使って音を流し楽しむのもよいが、目の前で演奏したり、うたを歌っているのを聴き、見るというのは驚きであり感動する。それが、信頼する先生だとまた格別であり、それを一緒に共有することが大切である。

#### (譜例1)

まず、音に慣れるために実践している1つとして、幼児の名前を使って歌う方法がある。

ピアノで「○○ちゃん」と歌いながら声をかける。呼ばれた幼児は名前のメロディーと同じ音で「はい」と答える。次に違うメロディーで「こんにちは」と歌うと幼児は同じように返してくる。言葉

\* 四條畷学園短期大学 非常勤講師

だけでなく音楽に合わせて行うことで返事をする楽しみが味わえ、音程を取る練習ができる。その後、メロディー唱へと移っていく。これも最初は教員のまねをしてうたう。それができると次は、教員は歌わずピアノだけ鳴らし幼児はその音を聴き取ってうたう。これにより、集中することさらには聴きとる力を養う練習と音感を身につけることができる。

(譜例1)

（指導者）  
 ○ ○ ちゃん  
 （幼児）  
 こん にち は  
 は い  
 こん にち は  
 ソ ミ ソ  
 ソ ラ ソ ラ ソ  
 ソ ラ ソ ラ ソ

また、集団で音楽を学ぶ方法として音楽に合わせて体を動かすものがある。

自ら体験することによって想像力や集中力、創造性が身につく集団で行うことによって協調性が養われる。

例として「たぬき」<sup>1)</sup>という曲で述べる。

(譜例2)

スタッカートで (♩=104位)  
 例①おなか  
 mp  
 ②おひざ  
 ③あたま  
 ④おなか

まず、幼児にたぬきを色や泣き声、食べ物などで想像させる。その後絵があるなら見せてもよい。そのときにたぬきのお腹が大きいことに注目させる。お腹が大きいとどんな音が鳴るのかと声をかけ叩いてみる。すると幼児も真似をする。そこで、上の楽譜を使って同じリズムで叩く。これで自然と音楽に合わせてリズム打ちが出来上がる。これ

ができると様々なバリエーションが広がっていく。

各小節にある4分休符はそのまま2分音符や8分音符のリズムを取り入れてみる。最初は難しいかもしれないが、少しずつできてくると達成感も生まれる。

次に、叩く箇所を変えてみる。まずは楽譜通りにやり始め、途中4分休符のところで「おしり」と声をかける。すると幼児は進んでおしりを叩き始める。またしばらくして「あたま」と声をかける。「ひざ」さらには「ほっぺ」なども同様に加えてみるとよい。

さらにリズムも変え、叩く箇所も変える応用もできると、何がくるか分からない状態で幼児は音を楽しみながら聴く力、集中力、反射性が身につく。

また、楽器を用いてリズムを学ぶこともできる。楽器を奏する喜びを味わわせ、音楽への基礎的技術や表現の芽生えを味わわせるのに幼児に使いやすい楽器は、カスタネット、すず、タンブリンなどが挙げられる。

まず、幼児たちに好きな楽器を選ばせる。どんな音が鳴るのか自由に叩かせてイメージを膨らませる。その後、それぞれの楽器の正しい持ち方を学ばせ、楽しく奏する準備をする。

リズムを言葉に置き換えると演奏しやすくなる。

幼児に好きな野菜・果物を挙げさせ、指導者がその言葉とともにリズム打ちをする。幼児はそれを真似て楽器を叩く。「トマト」なら4分音符3つ、「きゅうり」は2分音符と4分音符のリズムを学ぶことができる。「ブロッコリー」ではシンコペーションも自然と身につけることができる。もちろん、野菜・果物だけでなく、花や魚やおもちゃなどでもイメージを広げることができる。

これを簡単な音楽とともに合わせて拍子感やリズム感を養い、楽器を奏する喜び、さらには他者とのコミュニケーションが生まれる。

このコミュニケーションは、歌唱にも繋がってくる。

幼児のうたには「生活のうた」「季節のうた」「行事のうた」「手遊びのうた」など、様々な曲がある。

「生活のうた」には、「おはよう」作詞：増子とし 作曲：本多鉄磨、「はをみがきましょう」作詞：則武照彦 作曲：則武照彦、「おかえりのうた」作詞：天野蝶 作曲：一宮道子、などがある。どの曲も

うきうきするようなテンポと付点のリズムで作られており、幼児が毎日の習慣として生活のうたを歌うことによって、行動のメリハリを楽しみながらつけていくことができる。

「季節のうた」にはその名の通り、四季を感じることができる曲である。

春のうたには長かった寒い冬がようやく終わり、暖かな気候にあったやわらかいメロディーでできている。歌詞には花の名前を使っている曲が多い。

夏のうたには海をイメージした曲が多い。また初夏には雨も多く、「あめふりくまのこ」作詞：鶴見正夫 作曲：湯山昭、「あめ」作詞：杉山米子 作曲：小松耕輔なども取り入れてよいだろう。

秋のうたといえはまず、秋の代表的な木の実をテーマにした「どんぐりころころ」作詞：青木存義 作曲：梁田貞、「まつぼっくり」作詞：広田孝夫 作曲：小林つや江 が挙げられる。

寒い冬に向かって少し寂しいメロディーで作られている曲も多い。

冬のうたはやはり雪が出てくる曲が多い。代表的なうたは、文部省唱歌である「雪」。寒い冬を吹き飛ばすかのような軽やかな付点のリズムでできている。行事としては「お正月」作詞：東くめ、作曲：滝廉太郎、えほん唱歌である「豆まき」も取り入れることができる。

それぞれの季節にあった歌詞や音楽を取り入れており、季節の曲を歌うことによって歌詞から四季を感じられ四季のすばらしさを理解、共有することができる。

幼児はうたを歌うとき、歌詞を見ずに指導者の模倣で歌う。言葉の意味を理解し、その曲を表現するには指導者が心豊かな演奏をし、そのイメージを幼児に伝えることが大切である。

例として「しまうまのうた」作詞：小林純一 作曲：湯山昭<sup>2)</sup>を取り上げる。

(譜例3)

まず、指導するにあたって指導者が最後まで歌って聞かせる。何の動物の歌だったのか、どんなことをしていたのかを問いかける。すると幼児は歌詞を聞き取った単語を答えてくる。その単語を拾

い、しまうまのイメージを膨らませる。

1フレーズごとに模倣させ、1つの曲として繋げて歌うことができる。

演奏のポイントとして、この曲の前奏は軽やかな8分音符のリズムでできている。幼児が草原を駆けるしまうまのイメージができるように演奏することが大切である。

1番の歌詞に「おしゃれといっても」という歌詞が出てくる。この“いっ”の部分の音符は4分音符になっているが、スタッカートのように4分音符を切ると幼児は自然と促音を発音することができる。他にもたくさん出てくるのでその都度促音に注意して幼児が発音しやすいように促す。

2番の後半から曲の軽やかなイメージと違うところが急に出てくる。明るかった長調から少し寂しい短調になり、幼児にしまうまの心情をイメージさせながら歌うことができる。また、その短調から長調に戻る3番もイメージさせやすいところである。

(譜例3)

#### しまうまのうた

小林純一 作詞  
湯山 昭 作曲

♪ = 132 くらい はざれよく

おしゃれといっても しろとくろ  
はたべものなの つばらに

しまのうおぎを きてるだけ あと はかげあし はやいだけ しまっ しまっ  
はえたあおくさ たべるだけ あと はのみみず ほしいだけ しまっ しまっ

1. しまっしまっ しまっしまっ そんはくらを ライオンめ めつ たやたらに

せめてくる まほくらげの かは だいらい そこでひとまず にげるだけ

ぐれ まつくって かけるだけ しまっ しまっ しまっしまっ

### 3. まとめ

このように音楽を聞く、考え行動する、歌うということを幼児教育のうちから行うことは、生涯における自らの人格を形成していくのに必要な感性と豊かな表現が養われる。また他者と共有しコミュニケーションをとると、相手のことを考えられるようになり人と関わることの楽しさも味わえる。

指導者は幼児の創造、表現を十分に活かせるよう十分に注意し、音楽の楽しさを他者と共有できるようにしていかなければならない。

参考文献：

- 鈴木恵津子 保育士養成校における音楽教育の意義 鎌倉女子大学紀要第9号  
西野享丸 幼児期における音楽教育に関する一考察 豊岡短期大学  
宮本智子 幼児期からの音楽教育に関する考察パートⅡ 国際学院埼玉短期大学

引用文献：

- 1) 石井享 江崎正剛共著 株式会社オブラ・パブリケーション「たのしいリトミック1」6頁
- 2) 東保編 全音楽譜出版社「やさしい伴奏によるこどものうた1」43頁

- 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理 -



